

文語の苑

メールマガジン第二号

アラビア語事情

愛甲次郎

国際的には常識になっているが、日本ではあまり知られていないものにアラビア語事情がある。アラブ人が使うのがアラビア語であるから、アラブ語と言ったほうが間違いがないのであるが、日本では昔からアラビア語といつている。正確に言えばアラビア語を使うのがアラブ人である。アラブ諸国は東はオマーンから西はモーリタニアに亘る中東から北アフリカの地域に存し二十カ国近い。

現在のアラビア語事情は中世のヨーロッパの言語事情に良く似ている。中世ヨーロッパでは中心にラテン語があり公式記録、識者の交流はラテン語で行われ、ドイツ語、フランス語などは方言に近い存在だった。現在アラブ世界では文章を書いたり、正式の会議、会談を行うのに使うのは、もっぱら、コーランに用いられている古典アラビア語である。これに対し日常生活ではカイロ方言（エジプト語）、レバント方言（シリア、ヨルダン、レバノン等で使われる）、モロッコ方言などが話されている。

古典アラビア語はアラブ諸国だけでなく、広くイスラーム世界で教育されているからその通用範囲は極めて広い。言語としての質も高く、ラテン語、漢文、我が国の文語と並んで世界四大文章語の一つである。

平成二十三年八月

文語の苑

メールマガジン第二号

文語の長所

松岡隆範

「文語の雅、口語の俗」と言ふ人がある。然し俗な文語文は山程ある。雅の極致とも云ふべき口語文もある。従つて文語の長所とは雅俗の問題ではないのである。

又文語にはリズムがあると言ふ人がある。然しリズムの悪い文語文もあるし、リズムの美しい口語文もある。従つて文語の長所とはリズムの問題でもないのである。

では文語の長所とは何か。それは正確で嚴密な表現が出来ると言ふ處にある。

文語文は文語文法に基く。文語文法は口語文法よりもはるかに精緻である。助動詞の使用分けにより文意を正確に傳へる事が出来る。

だからこそ古來公文書はすべて文語體で書かれて來たのである。敕語、憲法、法律、告示等すべての公文書は「漢字片假名交り文語體」で書かれて來た。公文書は正確で嚴密でなければならぬ。文語體ならば自發、可能、尊敬、受身、使役、完了、過去、強意、確認、推量、意志、命令等の文法的表現が正確である。

だから公文書は文語體だったのである。これが千數百年、公文書の形式として續いて來たのである。

それが昭和二十年の敗戦に伴ふ國語破壊によつて斷切られた。そして當用漢字現代かなづかいによる平假名交りの口語文、しかも左横書といふ今日の慘状となつたのである。

私が今日、屢々文語體で文章を書き、文語文の復權を志すのは、雅俗とか、リズムと云ふ様な趣味的な趣旨ではない。國語を正確な表現で書き表したいといふだけのことである。

(平成二十三年八月記)

文語の苑

メールマガジン第二号

小倉百人一首 二 前書き その二

小倉百人一首よりずっと後の時代に、「白楽天」といふ(う)奇妙な能があります。唐から詩人の白楽天(白居易)が、日本の知力を試せとの勅命を受けて筑紫、すなは(わ)ち九州の海にやって来ます。小舟で釣りをする漁翁、実は和歌の神の住吉明神に会ひ(い)、先づ(ず)自分の名が知られてゐ(い)ることに驚き、辺りの風景を漢詩に詠めば、それを和歌に翻訳し返され、日本では鶯も蛙も歌を読むと教へ(え)諭されて、追返されます。

この筋から次の三つのことが分ります。一つは日本で、唐の白楽天の詩がよく読まれてゐ(い)たこと。それは源氏物語や枕草子に、白楽天の詩が頻繁に話題になつてゐ(い)ることからも窺は(わ)れます。次に日本人にとつて、漢詩は時に自分で作るけれども、あくまで外国、つまり中国のものだったこと。そして最後に和歌こそ、日本古来の漢詩以上の値打ちのあるものと考へ(え)られてゐ(い)たことです。

日本の最初の勅撰和歌集が、唐の滅亡の二年前に編纂された「古今和歌集」です。それ以前に、勅撰和歌集ではありませんが、膨大な数の和歌を集めた「万葉集」があることはよく知られてゐ(い)ます。残念なことに定家の時代では、万葉集の書かれた万葉仮名は、まだ全部の読み方が完全に確定して居らず、従つて定家の万葉集の理解も十分ではなかつた。ですから小倉百人一首の万葉集時代の和歌の選歌には疑問があります。

万葉集の後約百五十年は、和歌の衰へ(え)た漢詩全盛時代でしたが、その後の古今集から三百年後の新古今集までが、日本の和歌の全盛時代です。和歌の外にも物語、随筆、日記等の平安文学が盛んになりましたが、何と言つても中核は和歌であり、近年に至るまで、日本の文学の基礎にはこの時代の和歌の美意識や発想があります。

藤原定家の日本の和歌に対する見方は、現代の日本人と同じではありません。特に私たちは、江戸時代の国学研究や、明治時代以降の西ヨーロッパからの影響、特に正岡子規の評価に基づいて、万葉集を高く評価する。その反動として正岡子規が、古今集以後の和歌を低く評価した影響は、今も残つて居ります。然し最近、正岡子規の少々偏つた見方から、徐々に脱却してゐ(い)ると言つてよいでせ(しよ)う。

私は万葉集の、骨格の大きな歌や、素直で平明な感情の表出に共感しますが、その一方で古今集以降の、諧謔や見立ての歌、言葉の両義性を使って技巧を凝らした和歌にも、尽きせぬ興味をそそられます。特に新古今集時代の藤原定家を中心とする歌人たちの、時に難解ではありますが、深い味はひ(わい)のある歌に惹かれます。

かう(こう)したこと注目しながら、次回から時代順に、百人一首の幾つかの歌を読んで行きます(しよ)う。

文語の苑

メールマガジン第二号

文語歌曲「故郷・ふるさと」(文部省唱歌) その二

高野辰之作詞

兔追ひしかの山

* 子供の頃にこの歌を知り、兔など食べたこともないのに「兔が美味しい」の意だと思ひこんだ人がほとんどです。「し」は自分が直接経験した過去を回想する助動詞「き」の連体形です。「兔を追ったことがあつたな」

* 「かの」は「あの」と同じ。「かの女」は「あの女」のこと。彼女は恋人？

小鮒(こぶな)釣りしかの川

夢は今もめぐりて

忘れがたき故郷(ふるさと)

* 「がたき」は「難し」の連体形。「故郷を忘れるのはむづかしい」

如何(いか)にいます父母

* 「います」は「在る」とか「居る」の尊敬語。いらつしやる。今は父親や母親に対して敬語を使ふ人はほとんどゐないのではないでせうか。

恙(つつが)なしや友がき

* 「つつがなし」、つつがは、病ひや災ひ、それが無いこと。

思ひ出(い)づる故郷

* 伊豆といふのは、温泉・湯が出るといふことで、「いづる」から来てゐるとされてゐます。ですから、今のやうに「いず」と否定の「ず」を書いては、湯が出ないことになり、まじい結果になります。「思ひ出」が「おもひで」であることから推し量つても「おもひいづる」となります。

志(こころざし)をはたして

* 「志を果す」といふのが、一昔前の男子の夢とされてゐました。博士とか大臣になつて、つまり成功して、故郷に錦を飾ることを立志の目的としたものです。今では、志を果して總理大臣になつても故郷へ帰らうとはせず、その地位に必死にしがみつく人まで現はれてゐます。

いつの日に帰らん

* 「帰らん」の「ん」は、古くは「ㄥ」と「ㄹ」の發音があり、助詞「む」とおなじです。「む」には、推量 意志 適当・勧誘 仮定・婉曲 といった意味があります。が、「こころでは故郷へ必ず帰らう」といふ意志が表はされてゐます。

山は青き 故郷 水は清き 故郷

* 「山は青い」は次の「水は清い」と対をなしてゐますが、日本の青は色の範囲がまことに広く、グレイから藍、緑までを差してゐました。色を分ける言葉が無かつたのです。白い、黒い、青い、赤いの四つが元々の日本人に見えた色でした。紀貫之が『土佐日記』で難波にたどりつく前に和泉の海岸風景を描写して「五色に一色ぞ足らぬ」としてゐるのは黄色が無かつたためです。

谷田貝常夫